日本脂質生化学研究会

会　　報

1986年2月

日本脂質生化学研究会

（JCBL）

名票の点検のお願い

本会事務局が帝京大学の医学部に移って以来，会の事務を実質的に担当して来られた望月澄子氏（旧姓，福嶋）が，ご都合で山梨に住まわれることになり退職されました。

会務に関しては余人をって替え難い存在でしたので甚た困惑いたしましたが，この際名簿の管理と会費の納入状況をコンピューター化することにいたしました。

同封いたしました名票が貴殿に関する台帳になっています。会費の納入状況を含めて，記載事項の確認をしてください。

① 記載事項に誤りはありませんか？

② 記載事項に誤りがあったら
赤ボールペン修正の上，事務局までお送りください。

③ 誤りがなければ，
ご返送いただかなくて結構です。
ご返送いただかなかった名票については，誤りのないものと判断させて頂きます。

④ 備考欄に不足金額の入っている方は入会金や会費の値上げをご存知ないまま送金された方です。
今回の送金に加算して頂ければ幸いです。

⑤ 自宅送付の方は
自宅送付の項目に１とはいっています。１のはいっていない人は自宅送付の項目があっても自宅には送られていません。

⑥ 会員番号を覚えてください。
何かお問い合せの機に会員番号をおっしゃって頂ければ，即座に名票を呼び出すことができます。

事　務　局

６１年度会費払い込みのお願い

○ 昭和６０年度会費3,０００円を，３月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。

○ 振替用紙は１人１枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口に備えつけの用紙をご利用ください。今年度より振替の送料は事務局負担になりますので赤い振替用紙です。

会費送付先　　振替番号　　東京４－91400　　日本脂質生化学研究会

○ 本年度より入会希望の方は，事務局までハガキでご一報ください。そして，入会金2,０００円＋昭和６１年度会費3,０００円＝合計5,０００円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお，振替用紙通信欄に新入会とお書きください。

○ 本年より退会なさる方は，ハガキでご一報ください。
（事務整理の都合上，２年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。）

○ 本会報の受け取り人が，海外へ出られたり，或は他の場所へ転出された時は，お手数ですが返送または，転送をお願いします。

事務局（〒173）東京都板橋区加賀２－11－１　帝京大学医学部第一生化学教室
日本脂質生化学研究会事務局　TEL（03）964-1211
（内線）2320，2321

……貴方の会費で運営されています
今日，お払い込みください……

第２８回日本脂質生化学研究会研究集会のお知らせ

○ 会　　場　名古屋市立大学薬学部（〒467 名古屋市瑞穂区田辺３－１）
TEL 052-831-3059

○ 期　　日　１９８６年６月２８日(土)～２９日(日)

○ 実行委員　池 沢 宏 郎
（名古屋市立大学薬学部微生物薬品学教室）

○ 研究会参加費　3,０００円を予定しています。

○ 懇 親 会　１９８６年６月２８日(土)夕刻　郵便貯金会館でおこなう予定です。
〒461 名古屋市東区東桜１－14－13
TEL 052-951-7611
懇親会費は5,０００円を予定しています。

宿舎案内末頁の広告参照

研究集会発表演題の募集

今年の研究集会は一般演題，シンポジウムとも口頭発表を原則といたします。ただ会期は２日間（２会場）ですので，申し込み演題数の多い場合には演題制限あるいは誌上発表のみの場合があり得ます。

① 演題の申し込み

1. 一般演題
口頭発表　発表１５分，討論５分あるいは発表１０分，討論１０分
2. シンポジウム（公募いたします。奮ってご参加ください）
発表２０～２５分，総合討論時間を設けます。
「ホスホリパーゼの生物学的意義」
3. 発表時間は変更することがあります。
同一演者の複数の演題申し込みはご遠慮下さい。やむを得ず同一研究グループより複数の演題を申し込まれる場合には優先順位をつけて下さい。
申し込み締切　４月５日(土)

② 幹事会，実行委員を中心にプログラム編成を行い予稿集用の原稿用紙をお送りいたします。
原稿締切　５月１日(木)

期 日 厳 守

申し込みおよび原稿送り先
〒173 東京都板橋区加賀２－11－１
帝京大学医学部第１生化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局

昭和６１年度　日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を昭和61年6月28日(土)，懇親会に先だって，懇親会場に於いて開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長　山川民夫

議題　1.　昭和６０年度事業報告

1.　昭和６０年度決算報告ならびに監査報告

1.　昭和６１年度事業計画ならびに予算案

1.　その他

以上

昭和６１年度　日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を昭和６１年６月２８日(土)　正午（プログラム編成上，若干の変異があるかもしれません）より名古屋市立大学薬学部薬友会館で開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

議題　1.　昭和６１年度　日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討

1.　その他

- 幹事の皆様には別途，ご案内を申し上げます。
- 尚，昼食代1,０００円を申し受けます。

第28回　日本脂質生化学研究会講演申し込み用紙（中，小型，学部成人）

受付番号*　　区分*　　講演番号*

演題

A．栄養脂質，脂肪酸，プロスタグランジン　B．ステロイド，胆汁酸

40字×20行

15

20

— 特にタイプ用紙の必要はありません —

特別講演会のお知らせ

来る２８回日本脂質生化学研究会に先だって，公開講演会を開催いたしたいと思います。多数ご参加頂き，ご討論くださるようにお願いいたします。

日　時　　６月２７日(金)　午後３時より

会　場　　厚生年金会館（〒464 名古屋市千種区池下町２－63）

TEL　052－761－4181

会　費　　無　　料

演者および演題

1. Bis－（monoacylglyceryl）－phosphate metabolism and lipolytic enzymes in drug　induced lipidosis（仮題）

   カリフォルニア大学　Karl Y. Hostetler 教授

   （座長　山本　章）

2. ホスホリパーゼの作用から見た生体膜リン脂質の役割（仮題）

   名古屋市立大学　　池沢宏郎教授

   （座長　赤松　穣）

学術会議会員選出のご報告

60年６月３日，六本木の日本学術会議に各部の推薦人を集め，推薦人会議がおこなわれた。

生化学関連で登録された研究団体および，その推薦人数は 1985 年の会報に記載したとうりである。我々の日本脂質生化学研究会は学術会議会員候補を出さなかったが，他の研究団体はそれぞれ会員候補を推薦し，日本生化学会と日本過酸化脂質学会が八木国夫氏を会員候補とした。

協議の結果，無記名投票をおこない，第一回は規定の過半数に達するものがなく，投票方式を手直しした結果，八木国夫氏が過半数票を得て，新らしい方式による日本学術会議会員となり，現在，同会議副会長としてご活躍中である。尚，補欠として村地孝氏が推薦されている。

会の活動状況

① 第２７回日本脂質生化学研会研究集会

７月２６日２７日の両日，東京駅からそれ程遠くない経団連会館の，経団連ホール（１４階）シルバールーム（１０階），国際会議場（１１階）の三会場を使って開催された。

会場は，地味な本研究会にとっては，かってなかったような立派さで冷房も効きすぎる程効いているし，椅子も深々と大変座り心地がよかった。この会場を確保することに努力された内藤実行委員長に先ず敬意を表したい。事務局としては，何か創立２５年らしい企画をと考えつつも何もできていなかったのが，この会場はまことに２５周年にふさわしいと，ひそかに思った次第である。もっとも，こういうのを，他人のナントカで相撲をとるというのであろう。

それはとも角，内容の方は，一般演題１１０題を１演題１８分の持ち時間で，朝9時から夜の６時過ぎまで頑張ってしまった。プログラム編成の段階で，一演題１５分でという案もあったが，可能な限り討論時間をという主張が容れられた。

毎年のようにプログラム編成の段階で，できるだけ多数の演題を，一演題当りの発表時間をできるだけ長くという議論が繰りかえされるが，いつも決定的な結論は出て来ない。現在，情報社会といわれる世の中で，学会，研究会が続々設立され数を増やし，また奇妙なことに，どこも会員数が増えている。研究者人口がそれ程急速に増えつづけているわけではないのだから，一人が複数の，あるいは多数の学会に所属するようになり，そのどちらへも義理を欠くことができず，本質的には同じ演題があちらへもこちらへも出される。そして発表時間のすこし前に会場に現われて，発表が終ると，そそくさと鞄をかかえて，二三人の仲間と会場を立ち去る。研究会の場が，お互の情報を持ち寄って何が真実かを確め合う場ではなくて，ただ情報を発表する場，その情報の受け手が居ようが居まいが，ただ情報をまき散らすだけの場としてしか考えて居ないような研究者が，あちこちに増えているような気配である。

既に，科学情報も受けとめきれない程の氾濫状態になって久しい。科学情報の出し手になり，受け手になり，出し手と受け手の遂迫する場が研究会なのであろうが，

研究会のあり方も，今後の科学情報のあり方から考えてゆけば，何等かの方向が見いだされるのではあるまいか。

第１日，第２日共，午后からは第Ⅲ会場を作りシンポジウムをおこなった。いずれも，内藤実行委員の研究領域であるリポタンパク関連で，一演題２５分の持ち時間で発表と討論がなされた。シンポジウムが本当に syn であるためには，発表者だけでなく聴衆もひっくるめた層の厚さが必要であると思う。

第１日目夕刻，同会館内ダイアモンドルームで恒例の懇親会が開催された。東京らしい雰囲気であった。毎年，主催者の気苦労の一つは，懇親会の参加者数が不明であるということである。ここ数年は上限を，会場等の都合から，例えば１５０人としてそれ以上は参加できないとしているが，１５０人の参加者がなかった時に主催者は大騒ぎになる。今回はそのようなことはなかったが，研究会参加者の皆さん！会場で懇親会参加の呼び掛けがあったら，主催者があわてている証拠ですから，どうか積極的に参加してください。

尚，研究会の前日，同じ会場で午前１１時より，U．S．A．の三教授，スエーデンの一教授，計四名の講演会がありこれも盛況であった。

内藤実行委員とその医局の方々のご苦労に心から謝意を表します。

② 第２７回日本脂質生化学研究会総会

昭和６０年７月２６日，経団連会館ダイアモンドホールでの懇親会に先だって，午后6時５０分より，同ルームでおこなわれた。

総会の次第および議事内容は次の如くである。

イ．挨　拶　　山川会長

ロ．昭和５９年度事業報告および決算の承認を求める件　　植田幹事

６０年２月発行された会報に記載された５９年度事業報告につき承認を求め拍手をもって承認された。

引きつづき同会報に掲載されている決算について説明がおこなわれ，野島監査より監査報告がなされ，決算は拍手をもって承認された。

ハ．昭和６０年度事業計画および予算の承認を求める件　　植田幹事

６０年２月に発行された会報に記載された６０年度事業計画について承認を

求め拍手をもって承認された。予算案については５８年度５９年度と会費値上げを凍結し2,000円で会の運営をおこなって来たが，1988年のＩＣＢＬの日本開催に準備金が必要との判断から５７年の総会で承認された会費の値上げを６０年より実行に移し，値上げ相当分をICBL準備積立金として積み立てること，また，入会金と年会費の合算が，研究会講演集の販売価格を下廻わることから，研究集会当日に入会して，爾后コンタクトのつかない会員が少なからずあることから，入会金を2,000円に増額し，本当に入会する意志のある研究者にのみ入会していただくようにすることの二点を含みそれによる収入増と，支出にICBL準備積立金の項目を入れた予算案が承認された。

ニ．幹事再任，新任依頼の件　　山川会長

６０年１２月３１日をもって任期満了の幹事諸氏に６１年１月１日から６４年１２月３１日迄重ねて幹事をお引き受け頂いたこととおよび，新らたに池沢宏郎（名古屋市立大学）石橋輝雄（北海道大学）伊藤精亮（帯広畜産大学）の三氏に幹事を依嘱したい旨提案があり，承認された。更に，大野公吉，高橋善弥太両氏の脂質生化学領域での長年のご貢献を顕して名誉会員に推戴したい旨提案があり承認された。

ホ．1988年ＩＣＢＬのSteeriue Committee より接触のあった経過および，それに対する国内的対応の経過が脊山幹事より報告され，原則的に日本開催を引き受けることおよび，具体的討議のため脊山，植田両幹事を Graz（オースリア）での第２６回ICBLの際に開催される ICBL Steering Committee に送ることの承認を求め了承された。

ヘ．第２８回研究集会実行委員委嘱の件　　山川会長

名古屋市立大学薬学部の池沢宏郎教授にお願いしたい旨提案され，満場一致で承認され，同氏より挨拶があった。

以上で総会の議事を終了，直ちに懇親会に移った。このように懇親会に先だって総会をおこなうことは二度目の試みであるが，大変多勢の方にご参加頂いた。しかし，講演時間がのび，総会の開始が遅れ，一方，懇親会の方は暖い食事が予定の時間で準備されるとなると，どうしても総会を馳け足で進めなければならない。或いは，総会の前に開催される幹事会の時間を十分にとって実質的な討議をおこなうようにした方がよいかもしれない。現状では両方共馳け足である。

③　６０年度　幹　事　会

６０年７月２６日１２時１０分より経団連会館内1001号室において開催され，総会に提出する昭和５９年度の事業，決算報告および６０年度の事業計画，予算案の審議をおこなった。

また６０年度の幹事の再依頼，新任が承任され，学術会議会員として八木国夫氏が選出された経過が報告された。

また1988年ＩＣＢＬ日本開催に対する態度が協議された。

６１年度の研究集会実行委員を池沢宏郎氏にお願いすることを正式に決定した。

④　６０年度　在京幹事会

６０年１２月１３日午後６時より，神田の学士会館で開催された。

出席者

赤沼，赤松，荒木，安藤，石塚，植田，大橋，金子，川口，児島，鈴木，脊山，玉井，野島，原島，飯田，村松，山川　山田，和久，池沢（次期実行委員）各幹事）

原名誉会長，舟橋名誉会員，島崎（事務局）

議　題

㋑　６０年度事業報告および決算案

㋺　６１年度事業計画および予算案

㋩　６１年度研究集会計画

㋥　1988年ＩＣＢＬ問題

㋑㋺に関しては，別載の如く決定し，６１年度の幹事会，総会の承認を求めることにした。６０年度の予算執行の上で大きく変更のあった点について討議がなされ，従来人力に頼っていた名簿整備，入金管理にコンピューターを導入し，その関連支出を承認した。また㋥との関係で，ICBL開催準備積立金を支出しないことを承認，その会員還元の意味を込めて，今回より会費の郵便振替の送料を研究会が負担することにした。

㈥について池沢実行委員長より具体案の説明があり了承した。安藤委員より研究集会の活性化のために討論時間を長くする方がよいと発言があり，限られた日数，会場数の中での演題数の問題が再度議論されたが，実際に演題が集まった段階で再度考えることとした。

㈢は別掲（10頁）の如く脊山幹事からの報告があった。1988年のICBL日本開催は，ICBLの性格上，参加者を最大限300人に制限する強い意向がICBLの会長から提示され，これはICBLの問題であってJCBLが口をさしはさむ性質のものではないこと，900人近くの会員を擁するJCBLが開催を引き受けた場合，JCBLの中にICBLに参加できる会員と参加できない会員が出る恐れがあるためJCBLがICBL開催を引き受けるのは適当ではなく，ICBLのlocal committeeを日本国内に別途に作るべきであるとの了解に達し，その結果，野島幹事がその委員長(chairman）に適当であると推薦され，同氏もこれを了承した。

⑤　６０年度事業報告（６０年１月１日～６０年１２月３１日）

○　会　員　正会員　８１３名(６０年８０３名，５９年７９０名)

６０年度新入会４２名

退　会３２名

名誉会員　６名

賛助会員　２３社（２４口）

○　役　員　会　長　山川民夫　任期６１年１２月３１日迄

庶務監査　植田伸夫　〃

会計監査　野島庄七　〃

幹　事　略

○　第２７回研究集会の開催

６０年７月２６日（金）　経団連会館

２７日（土）

実行委員　内藤周幸

参加人員　４２０名

提出演題　一般演題　１１０題

シンポジウム　１９題

計　１２９題

○　５９年度会報の発行

６０年２月１日　２４頁

○　脂質生化学研究２６巻の発行

５９年７月３日　本文５２７頁　目次等１８頁　広告３６頁

⑥　６１年度事業計画

○　会　員　正会員

名誉会長　原一郎，木村雄吉，永井諄爾，山添三郎，舟橋三郎，数野太郎，山崎三省，大野公吉，髙橋善弥太

○　賛助会員

エーザイ株式会社	株式会社東京化学同人
株式会社大阪細菌研究所	東京田辺製薬株式会社
株式会社大塚製薬	株式会社東京プリント印刷
小野薬品工業株式会社	東洋曹達工業株式会社
共立出版株式会社	富山化学工業株式会社
三共株式会社	日本凍結乾燥株式会社
塩野義製薬株式会社	日本ルセル株式会社
株式会社資生堂	藤沢薬品工業株式会社
住友製薬株式会社	株式会社ヤクルト本社
第一製薬株式会社	山之内製薬株式会社
大日本製薬株式会社	雪印乳業株式会社

○　役　員　会　長　山川民夫　６１年１２月３１日迄

庶務幹事　植田伸夫　〃

会計監査　野島庄七　〃

幹　事

（任期６１年１２月３１日迄）

木村修一

（任期６２年１２月３１日迄）

秋野豊明，荒木英爾，安藤　進，板坂　修，大橋昌子，
奥田拓道，川口昭彦，鈴木明身，玉井洋一，中野益男，
西村顕治，野間昭夫，水柿道直，和久敬蔵

（任期６３年１２月３１日迄）

菅野道広，秦　葭哉，三成　脩（以上新任）
赤松　穰，今井　陽，植田伸夫，小倉道雄，香月裕彦，
金子　弘，金田尚志，日下喬史，楠瀬正道，児島英也，
斉藤国彦，坂上利夫，武内　望，武富　保，千田信和，
内藤周幸，永井克孝，野島庄七，野田万次郎，橋本隆，
林　陽，林　浩平，原島圭二，飯田静夫，平山　修，
藤野安彦，穂下剛彦，堀　太郎，牧田　章，松本　亮，
村松敏夫，山川民夫，山下　哲，山田晃弘，山本　章
薮内百治

幹　事

（任期６４年１２月３１日迄）

猪飼　篤，石塚稲夫，鬼頭　誠，小峰仙一，矢野郁也，
山本尚三，伊藤精亮，石橋輝雄，池沢宏郎

○　会　費

正会員年会費　　3,０００円（旧　2,０００円）
正会員入会金　　2,０００円（旧　1,０００円）
賛助会員年会費　２０,０００円（旧１０,０００円）

○　会報の発行

○　脂質生化学研究２８巻の発行

○　昭和６０年度研究集会の開催

実行委員長　池　沢　宏　郎　氏

⑦　６０年度決算および６１年度予算

収入の部	６０年度		６１年度
項目	予算	決算	予算
正会員会費	1,９５０,０００	2,０５８,０００	2,０００,０００(3)
入会金	４０,０００	８４,０００	５０,０００
賛助会員会費	４００,０００	４２０,０００	４２０,０００
講演集売上げ	１００,０００	１９２,０００	１２０,０００
広告収入	７６０,０００	1,０６０,０００	８００,０００
利子	8,０００	4,４２３	5,０００
寄付金	0	0	0
雑収入	0	0	0
小計	3,２５８,０００	3,８１８,４２３	3,３９５,０００
前年度よりの繰越金	４５２,８４０	４５２,８４０	７３４,８４３
計	3,７０８,０００	4,２７１,２６３	4,１２９,８４３

支出の部	６０年度		６１年度
項目	予算	決算	予算
研究集会補助	３００,０００	３００,０００	３００,０００
会報製作費	１８０,０００	１８５,０００	１９０,０００
講演集製作費	1,５００,０００	1,６６９,５００	1,６００,０００
旅費	３０,０００	２０,０００	１６０,０００(4)
郵送料・通信費	５５０,０００	７４７,８４０(1)	５００,０００
事務用品費	１０,０００	１１,９２０	１４０,０００(2)
会合費	１５０,０００	１３０,０９０	１５０,０００
謝金	６０,０００	７０,０００	６０,０００
総会経費	１０,０００	８,０００	１０,０００
事務経費	１００,０００	１００,０００	１００,０００
雑費	１０,０００	２９４,０７０(2)	１０,０００
ＩＣＢＬ準備積立金	３５８,０００	０	０
小計	3,２５８,０００	3,５３６,４２０	3,２２０,０００
次年度への繰越金	４５０,０００	７３４,８４３	９０９,８４３
計	3,７０８,０００	4,２７１,２６３	4,１２９,８４３

(1)　封筒新調　(2)　コンピューター関係の支出　(3)　振替送料の研究会負担　(4)　徳島からの往復旅費込み

第２６回ＩＣＢＬに出席して

東大・医・栄養　　脊　山　洋　右

第26回国際脂質生化学会（International Conference on the Biochemistry of Lipids, ICBL）が昭和60年９月３日から６日までオーストリアのグラーツで開かれた。参加者数は235名で，このうち日本から以下の12名が参加している。赤松（予研）、池田（工学院大）、植田（帝京医）、岡安（北大医）、工藤（東大薬）、鈴木（北大医）、脊山（東大医）、椨谷（帝国臓器）、中野（日本油脂）、野島（帝京薬）、林（近畿大）、山田（札幌医大）である。国別ではフランスからの49名が最大で、日本と並んで脂質研究会を持つという国情を反映したものと思う。

グラーツはオーストリア第二の都市で，人口は25万人というが市街地の65％が公園ということもあって、静かなたずまいをみせている。ここは大学の街で，16世紀に創設されたKarl-Franzens大学，19世紀初めに創られたグラーツ工科大学及び1983年創立の芸術大学がある。今回の主催者は工科大学のF. Paltauf教授である。

今回取りあげられたテーマは、1)細胞内における脂質の移送と膜構築、2)エーテル脂質の生理的役割と膜における性質、3)血清リポタンパクと細胞膜レセプターとの相互作用、の三点である。招待講演12、口答発表18、ポスター発表 106が行われた。講演は全て一会場で行われ、その前のロビーでポスター展示が行われた。発表内容については前述の12名の参加者が持ちかえった抄録を見て戴きたい。又、”蛋白質核酸酵素”（３月号）に見聞記として発表内容の概要を記しておいたので参考になれば幸いである．

9月3日の夜は市長招待のパーティが町の真中を流れるムール川のせせらぎにそびえる"Schlossberg"という名の城塞で夜景を眺めながら行われた。翌 4日の夜にはEggenberg城で州知事主催のパーティがあり、最終日の夕刻からはバスで郊外をドライブし,vine yardで大いに飲み、食い、且つ踊って親睦を深めた。

9月5日の午後にSteering Committeeが開かれ、植田教授と私が出席した。先づ、役員の人事が議題となり，GartonがPresident，GalliがSecretaryという現体制が今後４年間継続される事となった。続いて今後の学会予定に話題が移り，1986年はノルウエーのオスロで9月に開催され、1987年はイギリスのノッチンガムで行うことになった。続いて1988年の件が討議され、日本で開催される事になった。日本でのＩＣＢＬに際しては 1)Biological significance of phospholipases、2)Lipids as chemical mediators、3)Chemical and technological aspects of complex lipids、4)Nutritional aspects、の四項目がテーマの候補としてあげられ、オスロの委員会までに日本側で検討して三項目にすることになった。会の性格として講演は一会場で、ポスター発表を併用することとし、250名位の参加者が望ましいということが、Garton会長から日本側に要請された。ここで植田教授が特に発言を求め、日本脂質研究会には800名の会員が居るので、日本側だけでも250名の枠を守るのは難しい旨主張したが，Galli事務局長からＩＣＢＬとしてのルールを守ってほしいとの要望がなされた（脚注参照）。最後に次回の主催者Christophersenよりオスロの学会のfirst circularが配られて会の性格が説明された。ICBLがヨーロッパ以外で開催されるのは初めてで、我が国に寄せる期待の大きさがうかがわれる。

（脚注）この点に関しては昨年12月13日の在京幹事会で論議され,1988年のＩＣＢＬの運営は日本脂質研究会との共催ではなく、一応別組織のlocal committeeを作って対応することとなった．

第２７回ＩＣＢＬのご案内

日時　：　１９８６年９月１０～１３日

場所　：　ノルウエー、オスロ市郊外のノルウエー医師会館(Soria Moria)

トピックス　：　１．　脂肪酸代謝の調節

２．　脂質代謝におけるペルオキシゾームの役割

３．　レチノイド

発表形式　：　招待講演，short communication、及びポスター（上記以外の脂質生化学に関する演題も受け付けます）

連絡先　：　２７th　ＩＣＢＬ

Institute for Nutrition Research

P.O. Box 1046 Blindern

N-0316 Oslo 3, Norway

[参考資料]　此れまでに行われたＩＣＢＬの概要

	1979	1981	1983	1984	1985
	Cologne	Nyborg	Toulouse	Antwerp	Graz
Algeria	0	0	1	0	0
Argentina	1	1	1	0	1
Australia	1	1	3	2	2
Austria	13	4	4	6	42
Belgium	7	7	12	24	4
Canada	1	3	3	3	3
Czechoslovakia	0	0	0	1	1
Denmark	5	29	1	12	1
Egypt	0	1	1	1	0
Finland	4	2	4	2	2
France	41	8	140	45	49
FRG	57	16	21	25	31
GDR	0	0	0	0	2
Greece	0	0	0	0	2
Hungary	1	0	4	4	4
India	0	1	1	1	0
Iran	0	0	1	0	0
Israel	3	2	4	1	3
Italy	5	4	8	9	6
Ivory Coast	1	0	0	0	0
Japan	11	5	16	11	12
Jordan	0	0	0	0	0
Kenya	0	0	0	1	0
Netherlands	9	7	13	12	11
Nigeria	0	0	1	1	1
Norway	2	8	6	3	4
Poland	1	1	0	5	4
Spain	0	0	2	2	1
Sweden	8	4	1	2	5
Switzerland	12	0	5	1	4
Turkey	1	0	1	0	0
U.K.	18	21	16	22	12
U.S.A.	10	15	12	10	23
U.S.S.R.	0	0	0	3	0
Yugoslavia	0	0	4	3	3
Zimbabwe	0	0	0	1	1
Host country	57(27%)	29(21%)	140(49%)	24(11%)	42(18%)
U.S.A.	10(5%)	15(11%)	12(4%)	10(5%)	23(10%)
Japan	11(5%)	5(4%)	16(6%)	11(5%)	12(5%)
Total	212	140	286	213	235

	1979	1981	1983	1984	1985
	Cologne	Nyborg	Toulouse	Antwerp	Graz
Lecture	15	10	11	16	12
Short Communication	105	20	31	0	18
Poster	0	59	201	126	106
Total	120	89	243	142	136

ＩＣＢＬ－日本委員会（仮称）発足

野　島　庄　七

Graz （オーストリア）で開催されたICBL理事会の経緯に鑑み（６０年度在京幹事会記録参照…６頁），日本脂質生化学研究会と切り離した形で，1988 年のICBL日本開催を実施するＩＣＢＬのLocal committee を日本に設置することになり，その委員長の任に当ることになりました。

理屈の上からは，このLocal committee はICBLの人事ということになりますが，日本の脂質研究者の大多数を擁します日本脂質生化学研究会の会員の皆様のご協力なしには，委員会を構成することも，またICBLの会議を開催することも不可能でありますので，宜敷く，格段のご協力を賜りますよう，お願い申し上げる次第です。

Local Committee の構成，運営等につきましては未定でありますが，ＩＣＢＬの corresponding member である東大の永井克孝教授とも協議の上，広く人材を集めて，早い機会に発足させたいと存じます。皆様のご協力を賜り度く存じます。

また皆様のご意見を頂き度く存じますのでどの様な方法でも結構ですから，お寄せいただければ幸いです。

１９８６年1月２０日

ジェイムズ・クック奨学金について

——第７回の募集始まる——

この奨学金は，英国のジェイムズ・クック船長が，ニュージーランドに上陸してから200年を記念して1969年にニュージーランド政府により設けられたものである。

募集内容は人類学，生物学，地理学，地質学，地球物理学，歴史学，医学，海洋学に関する分野の研究をニュージーランドまたは南西太平洋で行う研究員で，期間は２年（３年に延長可能），合格者はニュージーランド大学または研究所の準教授の最高額に相当する年俸（NZ$47,000〜NZ$59,000）及びエコノミー往復航空運賃等の経費が支給される。

応募締切は1986年５月31日でニュージーランド学士院が扱っている。

なお，募集要綱及び応募書類は，ニュージーランド大使館（TEL03−460−8711）または日本学術会議事務局（TEL03−403−6291内223）にお問い合わせください。

「貝に操をたてて」

滋賀大学教育学部　板　坂　　修

「脂質生化学研究会がこんなに盛会に育って嬉しいが，恥をさらけ出して意見を交そうとした発足当時の味が薄れたなあ。」堀太郎先生に研究会の今日のあり方を唐突にお尋ねしたら，往時をなつかしむように目を細められ，「研究会にしている味を活かすように幹事が智恵をしぼってはいるんだが，生化学会の例会のような運営になっていかん。例えば，まとまった話に限ることにして，討議を深めてはどうかね。そうすることで研究機関を越えた協同研究が生れると良いね。」とおっしゃった。

この研究会の発足当初から係ってこられた堀先生が本年度末で滋賀大学を御退官になりますが，本誌をかりてお仕事の粗筋を紹介させて頂けることは大変光栄に思います。

先生は３５年間『貝の脂質』一筋に操を通してこられました。お生れになった瀬田町の名を冠した琵琶湖特産のセタシジミを最初に手がけられ，ここからホスホノ脂質（Ｃ－Ｐ脂質）を発見されました。これが下等動物，とりわけ軟体動物に広く存在することを明らかにされたことはご承知のここと思いますが，その後間もなくスフィンゴエタノールアミンを同定されました。

脂質の機能を調べるには組織別に分析することが必要ですが，そのためにはセタシジミは余りにも小さいので，大形の貝を材料にした方が良いと思われ，琵琶湖真珠の母貝であるイケチョウガイに乗り換えられました。不思議なことに貝などの下等動物にはガングリオシドが見当りません。このことに興味をもたれて貝の酸性糖脂質の検索に情熱を燃やされ，ついにこの貝の精子からウロン酸を成分とする珍奇な糖鎖をもつ糖脂質を発見されたわけです。目下，この精子の顔とも言うべき物質を用いて分子レベルで受精現象の扉を糖脂質を錠にして開けようとして研究に取組んでおられます。

今後，私達は後を引継いで，この精子の顔が卵に好かれる顔かどうか，研究を展開させていこうと思っています。

先生はご自身の研究生活をふりかえられて「犬も歩けば棒に当たったんだよ。」と笑われるが，私はいつかおっしゃった次のお言葉の方がより先生の研究態度を現わしているように思います。

「他所見をせずに自分の足元を深く，少しでも深く掘り下げれば，水は必ずわいてくるもんだよ。」

米国 NIH 奨励研究員の募集について
(1987年度)

本会議は，1959年以来毎年候補者を NIH に推薦してきていますが，本年も次の要領で候補者の選考を行います。　——応募締切り３月15日——

〈募集内容〉

(1) 推薦人員：６人以内
(2) 旅　　費：本人に対して往復旅費が支給される。
(3) 滞 在 費：本人に対しては，その経歴により年額約18,000米ドル～22,000米ドル支給（妻子に対しては補助がありません）。
(4) 研究期間：１年
(5) 研究報告：研究終了後 NIH あて提出する。

〈応募資格〉

(1) 資　　格：理・医・歯・獣医学又は保健衛生の分野で博士号を取得した35歳以下の研究者とする。
(2) 専門分野：医学，生物学・生化学・生理学・歯学・薬学及び獣医学等。
(3) 受入機関：米国内の大学又は研究機関（営利機関を除く）とし，受入について保証するむねの承諾書をあらかじめ得る必要がある。

この募集要項は，専門分野に関係のある国公私立大学・研究機関及び国立病院へ配布してありますが，御希望の方は返信用60円切手を同封の上，下記へ御請求ください。

日本学術会議事務局情報国際課国際調査係
〒106　東京都港区六本木７－22－34

日本学術会議月報（１月号）より転載

中国の生化学の教科書

植田伸夫　瓦提汗

私共，帝京大学の医学部の生化学教室に，中国の新疆ウイグル自治区ウルムチから瓦提汗君が勉強に来ています。

ウルムチ市，ご存知でしょうか，北京から列車では車中3泊を要する距離です（約3,000 km）。でもシルクロードの天山北路の街といえば，場所がはっきりわからないまでも，何となく，中国のはるか西部の砂漠の中の街のようなイメージがわくでしょう。とんでもありません。中国のほこる重工業都市の一つです。

そこに，新疆医学院という医科大学があります。瓦提汗君はそこを卒業した若い医師です。その彼が一冊の生化学の教科書をたずさえて来ました。奥付の写しを見てください。1978 年第1版です。全体B5版624頁のあまり良質ではない紙に印刷された本ですが，その目次の脂質代謝の項をのせてみました。皆さん，読んでみてください。

灰色塗り箇所は著作権に配慮して非公開

节：節に当ります，中国の新字です

的：日本語の用法ではなくて，助詞の“の”に当ります

和：“と”即ち and　です

甘油三酯：glycerol　triester ということになります。即ちTG です。

磷：勿論，燐ですがどうして石と火の違いが出たのでしょう。

胆固醇：コレステロール

酮症：ケトン症

さて，おひまな方は次の頁を読んでみてください。このリポタンパク質の図はどこかで見たことがあります。その次の頁は，脂肪酸の生合成です。（18, 19 頁参照）

さて，ここまででお気付きのように，ほとんどの言葉が中国語訳されているということです。脂肪酸の名前を見てみますと下表のようになります。

表

ギ　酸	甲酸	パルミチン酸	软脂酸
酢　酸	乙酸	ステアリン酸	硬脂酸
プロピオン酸	丙酸	オレイン酸	油　酸
酪　酸	丁酸	リノール酸	亚油酸
吉草酸	戊酸	リノレン酸	和亚麻油酸

生化学，医学とは限りませんがそのような領域を自国語で教育できるというのは，その国の文化水準を示すものだと思います。勿論，日本文明の母親である中国の文明のレベルが低いなどとは毛頭思いませんが，日本に西欧医学が移し植えられた当時，日本近代医学の先達は，原書にとり組み，それをモノにして，現在の様な日本語の教科書ができてきたのだと思います。

さて，この中国の教科書と現在の日本の教科書と比べて第一に気がつくのは，化学記号以外に横文字に相当するものがないことです。リパーゼではなくて脂解激素，レセプターでなくて受体，ピルビン酸でなく丙酰酸と書いてあります。日本の生化学の教科書にもこういう時代があったのかもしれませんが，何か短い期間でしたが日本語で野球をした時代を思い出しました，といっても今の若い人には通じないでしょうが……。

灰色塗り箇所は著作権に配慮して非公開

日本の教科書の場合，リパーゼピルビン酸は，Lipase　Pyruvic acid に苦もなく通じ，英文の論文を読み進めることにかえって役に立ちます。

ところが，この漢語の教科書で学んだ瓦提汗君にレセプターが通じないのです。トリカルボン酸サイクルではだめで，三羧酸循环なのです。これには大変困りました。因みに，瓦提汗君は，日本語は大変上手です。日本に留学するために，8ヶ月間，朝から晩まで日本語の特訓を受け，試験に合格して来ているのです。読み書き話すことには何の支障もありません。しかし瓦提汗君は英語の学習は殆んどしていません。文化大革命の影響ともいわれています。

日本語の乱れということがいわれます。勿論，語法の問題などもあるのでしょうが，日本語の中にエタイの知れない横文字が沢山はいってきていることが指摘されます。しかし，これは結構なことだと思います。日本人の先輩も，日本土着言語にむつかしい漢語を混えて教養を誇った時代があったのです。テレビの中で，山形のオバアチャンが"いいムードだね"といっていました。この調子で横文字の混入がどんどん進めば，やがてニューヨークで日本語を普通に話せば，アメリカ人に何とか通じてしまうということも起るのではないでしょうか。それを日本文化の喪失と嘆くのも当りますまい。ことによったら日本文化の本質はそういうものであったのかもしれません。

話は主題を見失ないましたが，或る領域の教科書は自国の文化を誇り，国粋主義であってはかえって不都合を生じます。新らしい中国の生化学の教科書には，テクニカルタームには横文字がたくさん取り入れられればよいと思います。

最後になりましたが，瓦提汗君を改めてご紹介申し上げます。日本脂質生化学研究会の，多分，第一号の外国人会員になるのだと思います。国籍は中国ですが，小数民族のカザフ族で，中国人といっても漢民族とは生活習慣が異なり，豚肉のはいった中華料理は一切食べません。2年間日本で勉強しますので，皆様に直接お教えを頂くことがあると存じますが，その機には宜敷くお願いいたします。

第3回AOCS-JOCS Joint-Meeting が開催されます。

本年5月14～18日にホノルルで上記の会議が開催されます。

演題提出は不可能ですが参加ご希望の方は，日本油化学協会にお問い合せください。

〒103　東京都中央区日本橋3－13－11

TEL　03-271-7463

4th FAOB Congress がシンガポールで開催されます（広告参照）

本年11月30日から12月5日迄　上記会合が開催されます。内容は下記のとうりです。

尚，参加者は折込広告をご覧ください。

PLENARY LECTURES

David Baltimore *USA*	The regulated synthesis of antibodies
Joseph L. Goldstein *USA*	Lipoprotein receptors and cholesterol homeostasis: a regulatory system unveiled through analysis of human mutants
Choh Hao Li *USA*	β-Endorphin: structure and activity
Peter Mitchell *England*	Realistic models of transport processes
Yasutomi Nishizuka *Japan*	Inositol phospholipids and stimulus-response coupling

SYMPOSIA

PLANT AND AGRICULTURAL BIOCHEMISTRY

Peter H. Quail *Madison, USA*	Phytochrome: A regulatory photoreceptor that controls the expression of its own gene
Barry G. Rolfe *Canberra, Australia*	Bacterial and plant contribution to Rhizobium infection of legumes
Kenneth V. Thimann *Santa Cruz, USA*	The control of leaf senescence and its possible relation to agriculture

CLINICAL BIOCHEMISTRY

Britton Chance *Philadelphia, USA*	In vivo phosphorus NMR spectroscopy
Robert M. Nakamura *La Jolla, USA*	Recent developments in heterogeneous and homogeneous enzyme immunoassays
J.W.O. Tam *Hong Kong*	Molecular studies of human genetic diseases

GENE STRUCTURE

Peter Gruss *Heidelberg, Germany*	Elements controlling the differential expression of eukaryotic genes
Alexander Rich *Cambridge, USA*	The chemical and biological consequences of left-handed Z-DNA

REGULATION OF GENE EXPRESSION

Bernard Roizman *Chicago, USA*	How does Herpes simplex virus regulate its gene expression?
(Second speaker pending)	

BIOCHEMICAL PHARMACOLOGY

Philip Cohen *Dundee, Scotland*	The role of protein phosphorylation in the hormonal control of enzyme activity
Emil Thomas Kaiser *New York, USA*	Construction and biological properties of designed peptides
R.K. Ralph *Auckland, New Zealand*	Topoisomerases and anti-cancer drugs

HORMONES AND MEDIATORS

Tatsuo Suda *Tokyo, Japan*	Modulation of cell growth, differentiation and tumour promotion by vitamin D
Michio Ui *Sapporo, Japan*	The inhibitory guanine nucleotide regulatory protein (N_i) as a mediator of hormone action
Ellen H.A. Wong *Singapore*	Adenosine and its role as a hormone and metabolic modulator

APPLIED BIOCHEMISTRY

Kunthala Jayaraman *Madurai, India*	Strategies for optimization of production of biocides from Bacilli active against mosquito larvae
Victor and Ruth S. Nussenzweig *New York, USA*	Engineering a malaria vaccine
Kunio Yagi *Mitaka, Japan*	Production of riboflavin and its derivatives

MARINE BIOCHEMISTRY

Rita R. Colwell *Adelphi, USA*	The potential of marine biotechnology in basic research and in industrial application
Choy L. Hew *Toronto, Canada*	Biochemical adaptation to the freezing environment: structure and function of antifreeze polypeptides
J. Jayaraman *Madurai, India*	Salinity adaptation in fish — bioenergetic aspects

5

BIOPHYSICAL CHEMISTRY

T.L. Blundell *London, England*	Structural evidence for gene duplication in the evolution of proteins
Lawrence W. Nichol *Armidale, Australia*	Protein association equilibria: perturbation by ligand binding and by space-filling macromolecules
C.L. Tsou *Beijing, China*	Activity changes during the folding and unfolding of protein molecules

NEUROCHEMISTRY

Lourdes J. Cruz *Manila, Philippines*	Presynaptic peptide toxins from Conus venom
Graham A.R. Johnston *Sydney, Australia*	Multiplicity of GABA receptors
Y. Peng Loh *Bethesda, USA*	Neuropeptides: biosynthesis and function

BIOCHEMICAL BASIS OF HUMAN DISEASE

C. Ronald Kahn *Boston, USA*	Alterations in the insulin receptor kinase in diabetic syndromes
Arthur H. Rubenstein *Chicago, USA*	(Title pending)

BIOCHEMISTRY OF THE IMMUNE SYSTEM

Tasuku Honjo *Kyoto, Japan*	Molecular mechanisms of creation of immune diversity

(Two other speakers pending)

PROTEINS AND ENZYMES

Sidney Altman *New Haven, USA*	Enzymatic cleavage of RNA by RNA
P.K. Maitra *Bombay, India*	A genetic study of carbohydrate metabolism in yeast
David I. Meyer *Heidelberg, Germany*	Co-translational events in protein secretion

ONCOGENES AND GROWTH FACTORS

E. Premkumar Reddy *Nutley, USA*	Retroviral oncogenes and human neoplasia
George J. Todaro *Seattle, USA*	(Title pending)
Anthony W. Burgess *Melbourne, Australia*	Epidermal growth factor

TECHNOLOGY SESSIONS

Richard J. Guillory *Hawaii, USA*	Photoaffinity labelling
Victor C.W. Tsang *Atlanta, USA*	Protein blotting
Akiyoshi Wada *Tokyo, Japan*	The strategy for building an automatic DNA sequencing system
David C. Ward *New Haven, USA*	Non-isotopically labelled DNA and RNA probes
Richard J. Simpson *Melbourne, Australia*	Protein microsequencing
As well as:	Recent advances in HPLC Plant cell culture Construction of genomic libraries

COLLOQUIA & POSTER SESSIONS

Investigators will be invited to submit abstracts of their work in several categories including:

Plant biochemistry
Applied and industrial biochemistry
Marine biochemistry
Tropical diseases
Clinical biochemistry
Biochemical correlates of human disease
Nutrition
Intermediary metabolism
Biochemical pharmacology
Hormone action and chemical signalling
Biophysical chemistry
Enzyme mechanisms and inhibition

6 7

編集後記

この会報の発行が大変遅くなったことをお詫び申し上げます。

特別な事由があってのことでなく，こまごまとした事像の複合の結果ということでご勘弁ください。

望月さんが退職したこと……長いこと本当にご苦労さんでした……。名票コンピューターに切り替えたこと……かえって事務量が増えたのかもしれません。何が便利になったのか？と考えています。会報くらい簡単に出来ると油断したこと。事務局のある帝京大，医，第1生化学教室に外国人留学生が二人現われて，その方に気を奪われていたこと，そして庶務幹事の家族に病人が出たことなどなど……の複合効果です。

来年からは，如何なる複合要素があっても，2月1日発行を遅らせないようにいたします。

東京はカラカラ天気の冬でした。そして既に春の息吹きも濃くなって来ました。未だ雪のある地方の皆様に心からお見舞申し上げます。

事務局

第28回 日本脂質生化学研究会研究集会の宿泊・航空・観光等の御案内

1 宿泊のご案内

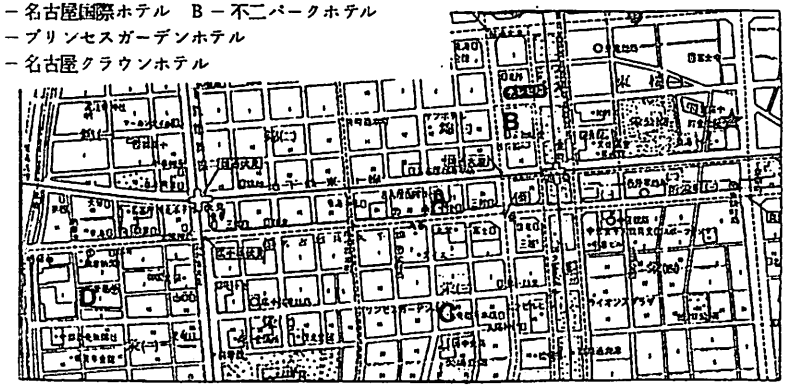
1) 取扱期間　昭和61年6月27日(金)～29日(日)
（但し，上記日程の前後についても，御希望があれば，同条件にて手配いたします）

2) 利用するホテル

地図上の位置	宿泊ホテル名	部屋タイプ	料金	申込記号	御案内（栄－名古屋より地下鉄藤ケ丘行で2駅目4分 伏見－　〃　〃　1駅目2分）
A	名古屋国際ホテル	シングル	10,000	AS	地下鉄栄駅8番出口より西へ徒歩3分錦通り沿い
		ツイン	9,500	AT	
B	不二パークホテル	シングル	7,500	BS	地下鉄栄駅2番出口より北へ徒歩1分 大和証券2F　大津通り沿い
		ツイン	7,000	BT	
C	プリンセスガーデンホテル	シングル	7,5,00	CS	地下鉄栄駅下車サカエ地下街を通り丸栄百貨店西側の道を南へ徒歩6～7分
		ツイン	7,000	CT	
D	名古屋クラウンホテル	シングル	6,000	DS	地下鉄伏見駅7番出口より西進，朝日新聞角を左折　伏見より徒歩7～8分
		ツイン	5,500	DT	

※ 料金は1泊朝食付・税金サービス料オール込のおひとりあたり金額です。
（団体割引が適用してあり，割安になっております）

☆－郵便貯金会館（28日の懇親会々場）
A－名古屋国際ホテル　B－不二パークホテル
C－プリンセスガーデンホテル
D－名古屋クラウンホテル



※ 前夜祭会場は地下鉄東山線池下駅東側の愛知厚生年金会館です。
（名古屋・伏見・栄から地下鉄藤ケ丘行にてそれぞれ11分・9分・7分）

2 名古屋までの交通について

・航空機御利用の場合，同一便にて15名様以上ご搭乗ならば団体割引適用できます。
・公立学校共済組合・地方職員共済組合・文部省共済組合・私立学校教職員共済組合などの組合員の方が，2名様以上で国鉄を201Km（往復）以上御利用の場合，運賃・料金が2割引になる保養所きっぷの制度があります。

いずれも詳細は最寄りの近畿日本ツーリスト又は052－962－6981へ，お問い合せ，お申込み下さい。

広告

3 観光のご案内

研究会終了後，中部地区の著名な観光地を効率よく巡っていただけるよう，次のような特選コースをご用意しました。お誘い合せの上，是非ご参加下さい。

Aコース〔明治村とライン下り・鵜飼　1泊2日〕　参加費用　¥23,000

期　日	行　程
6月30日(月)	名古屋 9:30 ═══ 明治村 10:30 13:00 ═══ 英泉太田 13:40 14:00 日本ライン下り ～～～～～ 犬山橋 15:00 ═══▶
	◀═══ 犬山城 15:30 16:00 ═══ 岐阜（夜は鵜飼見物） 16:40　長良川温泉（泊）
7月1日(火)	朝食後　解散

Bコース〔伊勢と鳥羽　1泊2日〕　参加費用　¥13,000

期　日	行　程
6月30日(月)	名古屋 9:25 近鉄特急 10:45 宇治山田 ═══ 11:00 伊勢神宮（内宮） 13:00 スカイライン経由 14:00 鳥羽
	到着後フリー （水族館・御木本真珠島・鳥羽湾めぐりなど）　鳥羽(泊)
7月1日(日)	朝食後　解散

※　両コースともお申込み15名様以下の場合，催行を中止することがあります。

4 申込み方法・手続など

1）申込み方法　　下欄申込書に必要事項を記入の上，下記営業所宛ご送付下さい。

〒460　名古屋市中区錦3－14－15　カゴメビル6F　　Tel（052)962-6981

近畿日本ツーリスト　名古屋ユーストラベルセンター　　担当：山内・加藤

2）〆　　切　　昭和61年5月20日

3）変更・取消について　　お申込み〆切後5月26日以降の変更・取消については，次の取消料を頂きます。（6月10日までは1泊につき1,000円，18日までは2,000円，23日までは3,000円，前日は4,000円，当日取消は全額）

4）費用支払い等につきましては，後日ご連絡致します。

……き…り…と…り…線……

第28回　日本脂質生化学研究会　宿泊・観光　申込書

No.

昭和61年　　月　　日

氏　名	年令	性別	宿泊日 26	27	28	29	申込記号	観光	備　考	氏　名	年令	性別	宿泊日 26	27	28	29	申込記号	観光	備　考
例 ○○○	30	男		○	○	○	BT	A	××氏と同室 6/30も希望	③									
①										④									
②																			

※申込記号とは前ページ1 2)利用ホテルの表にある申込記号です。　ex BT…不二パークホテルツインの意味

上記のうち申込責任者＿＿＿＿＿＿＿＿㊞　連絡先住所 Tel

（必ずお書き下さい）

第4回アジア・オセアニア生化学者連盟会議出席旅行（4TH　FAOB）ご参加のお誘い

主催：近畿日本ツーリスト株式会社
（運輸大臣登録一般旅行業務第20号）

第4回FAOB会議は，来る11月30日より12月5日までシンガポールにて開催されます。会議にご参加になられる皆様方のご便宜を計るため，会議出席旅行のプランを企画いたしました。会議出席だけの最短コースと会議出席とペナン島でのバカンスコースの2コースをご用意いたしましたが，その他皆様のご要望に応じて日程を検討することも可能です。

皆様，お誘い合わせの上，奮ってご参加下さい。

A．会議出席コース（8日間）
期間 1986年11月29日(土)～12月6日(土)
旅行代金　169,000円
日程
11/29(土)　東京／シンガポール
11/30(日)　シンガポール
～12/5(金)　（会議出席）
12/6(土)　シンガポール／東京

B．会議出席とペナンコース（9日間）
期間 1986年11月29日(土)～12月7日(日)
旅行代金　189,000円
日程
11/29(土)　東京／シンガポール
11/30(日)　シンガポール
～12/4(木)　（会議出席）
12/5(金)　シンガポール／ペナン
12/6(土)　ペナン／シンガポール
シンガポール発
12/7(日)　東京

上記代金に含まれるもの：航空運賃（エコノミークラス）宿泊代（2人一室），全朝食代，添乗員費用（Bコースに1名）他

最少催行人員：各コース　10名

＜お申込み方法＞　ご出席ご希望の方，又はご出席を考慮中の方も，詳細のパンフレットをお送り致しますので下記まで連絡下さい。
会議資料も入手しておりますので，必要な方はお申し出下さい。

＜問い合せ・申込先＞近畿日本ツーリスト株式会社
虎ノ門海外旅行営業所
担当：　中村・西島・喜多川
電話：　03－502－2921
住所：　〒100 東京都千代田区霞ケ関1－4－1　日土地ビル1F

尚，次の会議に関しましても，旅行等ご便宜をお図り申し上げる所存です。資料等ご必要な方はご連絡下さい。

- ◇ 17th FEBS MEETING（8月24日～29日，西ベルリンにて）
- ◇ 27th INTERNATIONAL COFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPID（9月10日～13日　オスロにて）
- ◇ IXth INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON DRUGS AFFECTING LIPID METABOLISM（10月22日～25日　フローレンスにて）
- ◇ PAF 2nd INTERNATIONAL CONFERENCE（10月26日～29日 米国にて）